

38 幻雲が引用した『東垣十書』

○真柳 誠・宮川浩也・小曾戸 洋

室町時代の学僧、幻雲は宋版『史記』に膨大な注を書き込んでいた。この『史記』は国宝に指定され、いま国立歴史民族博物館に所蔵されている。当本の「扁鵲倉公列伝」部分の幻雲注には逸書を含む多くの中国医書が引用され、室町時代の医史研究における史料価値は高い。その概略は第九一回日本医史学会で報告したが、幻雲は医学叢書の『東垣十書』本と推測される書も引用していた。

『十書』は『脈訣』『内外傷弁惑論』『脾胃論』『蘭室秘蔵』『湯液本草』『此事難知』『格致余論』『局方發揮』『外科精義』『医経溯洄集』の計一〇書からなる。その書誌は従来不明だったが、近年ほぼ解明した。一方、『十書』の一つ、『湯液本草』が一乗谷朝倉氏遺跡から近年出土した。

この『湯液本草』の一乗谷への伝来に、幻雲ら文人が関与したことも明らかにした。

いま我々は幻雲注を翻字している。そして当翻字と近年の研究結果より、幻雲が引用した『十書』の版本も論定できることに気づいた。

さて幻雲注が引く『脈訣』『湯液本草』『此事難知』『格致余論』『医経溯洄集』の五書は、『十書』収録書と一致する。さらに幻雲注は「幻謂、紫虚脈訣、東垣十書之一也」「幻曰、朱彦脩格致余論、乃東垣先生十書之一也」と説明し、『脈訣』と『格致余論』は『十書』本と明言する。他方、『医経溯洄集』は『十書』に収録され、初めて刊行・流布したと考えられる。幻雲がこの五書に『十書』本を使用したことはまず疑いない。

幻雲（一四六〇～一五三三）以前に刊行された『十書』は初版から年代順に、①明・遼藩第一版（一三九九～一四二四）、②明・遼藩第二版（一四八四）、③朝鮮・内医院活字版（二四八八）、④明・熊氏梅隱堂版（二五〇八）、⑤明・遼藩第三版（二五二九）、⑥朝鮮・内医院整版（二五二九～四四）がある。幻雲はいずれの版本系統を使用したのだろうか

か。

ところで幻雲注には「格物余論三十四丁、人迎氣口論」と記す部分がある。つまり『格物（格致の誤写）余論』の第三四丁に「人迎氣口論」があった。④の『格致余論』がこれに合致し、第三四丁一七行目と第三五丁八行目に「人迎氣口論」がある。④は書式（毎丁二〇行、一行一七字）や巻数・丁数まで①を忠実に復刻したので、①の『格致余論』は現存しないが、やはり同じ位置に「人迎氣口論」があったろう。①と④が候補である。

ちなみに「人迎氣口論」以前の字数は計一一四九二字。それで①④より一行の字数が一字だけ多い②（毎丁二〇行、一行一八字）でも、「人迎氣口論」は第三二丁一九行目からとなり、第三四丁からは大きく離れてしまう。したがって写本でも、行数・字詰めまで完全に同じでなければ第三四丁の位置にならない。当然、他の版本に基づく写本で、偶然この位置に「人迎氣口論」がある可能性もほぼ否定される。

じつは朝倉氏遺跡出土の『湯液本草』写本も、行数・字詰めまで①④と完全に同じだった。そして当時の諸状

況から④の熊氏本に基づく蓋然性が高いと判断された。

これは幻雲が引用した『格致余論』にもあてはまる。さらに幻雲注は熊氏（宗立）編刊の『俗解八十一難経』『脈訣図要俗解』『医書大全』なども引く。以上より、幻雲が使用したのは④熊氏梅隱堂版の『東垣十書』、ないしその忠実な写本の可能性が高いと判断される。

なお幻雲注に「湯液本草三卷、海蔵王好古所撰也」と記す部分があるのに、①④の『湯液本草』はみな二巻本と推定される。下巻を分けて三巻本としたのは、周氏仁寿堂の一五八三年刊本からで、幻雲没後のこと。ならば④は上巻が二八丁に対し、下巻が一五二丁もあるので二分冊し、計三冊本とされた場合があつていい。これを「湯液本草三巻」と記した可能性もある。

（北里研究所東洋医学総合研究所・医史学研究所）